講師　：　河合章行
鳥取県立むきばんだ史跡公園

「公園職員が語る妻木晩田遺跡入門」 を聴いて

聴講日　：　R 3.4.3
むきばんだやよい塾第22期

妻木晩田遺跡は、1901年に最初に確認され、1931年にも別名で確認されています。1992年に試掘調査で遺跡が確認され、丘陵上を調査することになります。1997年に日本海新聞から発掘の報道がされると、保存運動が高まり、行政を動かして遺跡の保存が決まりました。1999年12月には国史跡として指定され、県が調査及び整備を担当することになりました。

妻木晩田遺跡の概要

洞ノ原地区には住居と四隅突出型墳丘墓を含む墳墓群と環濠があり、 仙谷地区には墳墓群、 妻木新山地区は初期の村の中心で、 妻木山地区や松尾頭地区は最盛期の村の中心と言われます。松尾頭地区には大型の庇付きの掘立柱建物跡があり、大型の壁立ち竪穴住居の支柱穴が壁沿にあることから、王の住まいではないかと考えられています。20棟あまりの焼失住居も見つかっています。

遺跡名の由来は、遺跡の中央部の地名“西伯郡大山町妻木字晩田”の大字と小字をつなげた名前で、平成になってからの大字と小字で遺跡名を付けると言う統一ルールに従っています。

妻木と言う名は、“昔、六木(むき)村」出身の女性が光仁天皇の后となり、「伯耆には　雲のかけはし大山寺　妻来の里も　あるとこそ聞く」という歌を賜ったことに由来して、「妻木」を「むき」と読む”と伝わるところから来ています。他にも、遺跡内の洞ノ原、妻木新山、松尾頭、仙谷なども字から由来しています。

史跡に指定されている面積が150haで遺跡全体では170haです。大阪の池上曽根遺跡、吉野ヶ里遺跡、原の辻遺跡などと比べるとその広さがわかります。弥生時代中期の終り頃から、古墳時代の初めにかけて連綿と250～300年くらいの累積の状況として、竪穴住居450棟、高床倉庫500棟以上が見つかっています。

・弥生時代中期の終り(西暦BC1世紀後半から1世紀前半)に 松尾頭地区に人が住み始めます。周辺に落とし穴とか、貯蔵穴とか、段状遺構が作られ始め、このあたりを開発し始めたことがわかっています。
・弥生時代後期前葉(1世紀後半)になると、村の中心は尾根を二つ隔てた妻木新山地区に移動します。この時期に洞ノ原地区には墳墓が作られ、環濠が掘られていますが、倭国大乱と関係があったわけではなく、洞ノ原にはまだ集落はありません。
・弥生時代後期中葉になると、妻木山地区や松尾頭地区にも住居が多く作られるようになり、新山、妻木山、松尾頭の三つの地区が住まいの中心になっています。洞ノ原地区にも墳墓が残っているものの、仙谷地区に墓地が移っていきます。環濠はまだ機能していて周辺に建物はありません。
・弥生時代後期後葉(2世紀後半)になると、妻木晩田が最盛期を向かえますが、新山地区の建物は減少し、妻木山地区が最大になります。松尾頭では特殊な建物が作られ、洞ノ原地区にも少数ながら建物が作られるようになり、墓地や環濠といった特殊な場所にも人が住むようになります。また、松尾城地区の丘陵上にも住居が作られるようになります。
・弥生時代終末期(卑弥呼の時代、3世紀前半)になると、竪穴住居が減ってきます。新山地区、松尾頭地区にも作られなくなりますが、それなりの数が残っているので周辺と比べるとまだ大きな村だったと思われます。
・古墳時代(3世紀後半から)になると竪穴住居はほとんど建てられなくなります。勢いがあるときと、衰退の時期があり、また地区によって人がたくさん住む時期とそうでない時期があり、変遷を知ることができます。

甦る弥生の国邑

遺跡からは、青谷上寺地と並び鳥取県では群を抜いて多くの鉄器が出土しています。工具類を主体として、武器や農具、加工のときにできた鉄器片など総数400点以上が出土しています。住居の中には高温で焼けた炉跡を持つ遺構があり、鉄器の入手だけでなく、北部九州から伝わった技術を使って叩き石や台石を使って道具を作っていたと考えられます。

弥生時代中期後半くらいから日本海沿岸にも鍛冶の痕跡が分かる遺跡があります。これは、小松に良質な碧玉を産出する場所があり、この碧玉が北部九州にもたらされる過程で、その交換材として北部九州から山陰に鉄がもたらされたためです。北陸から碧玉が、新潟から翡翠が山陰にやってくる日本海ルートの交流によって鉄が大量にもたらされたと思われます。

妻木晩田の玉造りの時期は少し遅く、そのため素材は北陸の碧玉ではなく、松江の火仙山の素材と島根半島でとれる緑色凝灰岩です。中期頃の技術(石鋸を使った古い作り方)で作ったものもあるし、後期に新しく伝わった技術(鉄器(鑿)の存在を前提にした作り方)の両方が使われています。

弥生の宝石(ヒスイ・碧玉製玉)と鉄を、九州と北陸と山陰が交換することで様々な物資を入手していましたが、物資の運搬には日本海に点在する潟湖(ラグーン)が天然の良港として機能していました。潟湖は当時日本海沿岸に多く存在し、弥生のネットワークを形成する上で重要な役割を果たしていました。例えば淀江や青谷、東郷湖や湖山池などに潟湖の名残りを留めています。当時は海流に逆らい西に行くには沿岸部を少しづつ移動したと思われ、潟湖はなくてはならない存在でした。

復元建物の再整備

現在の整備や弥生の村の復元で完了しているのは、洞ノ原地区、妻木山地区の一部、妻木新山地区、仙谷地区の一部です。王様の住まいと言われている松尾頭地区とか、大型の庇付き掘建て柱建物などは、南部の二期整備計画の範囲内なので、まだ取り掛かれていません。仙谷地区の整備に取り掛かれるようになり、本年度から整備を始めます。

ムラの姿は3～5棟の竪穴住居と1～2棟の高床倉庫で、1組の単位であることが発掘調査で明らかになっています。最盛期(2世紀後半頃)には、この単位が30組程度が集まっていることもわかっています。復元作業もこの3～5棟の竪穴住居と1～2棟の高床倉庫をセットで進めています。

建物(竪穴住居)を復元する際には、上屋の情報がないので、焼失住居から見つかる炭の部材とか、青谷上寺地で出土した建築部材とか、絵画土器や銅鐸に描かれた弥生人の絵などの情報を元に検討を重ねて設計図を書きます。 その設計図から模型を起し、それから復元作業に入ります。

高床倉庫も同じで、四本柱で四つの穴しかありませんが、柱間の長さや柱の太さなどの情報から二種類の高床倉庫を復元しています。壁を持つ大型のタイプと壁を持たず床の上にすぐ屋根がある屋根裏式の小型タイプを復元しています。

洞ノ原地区は景色のよいところで、最盛期の2世紀後半ころには掘建て柱建物があります。復元直後の四隅突出型墳丘墓はきれいでしたが、今は芝に覆われてしまっています。

見晴らしがよい洞ノ原は車椅子での見学もできるように計画されたのに対して、妻木山地区は、弥生のムラを再現するコンセプトから舗装した道路を付けずに復元しました。居住単位を意識して、駐車場から進入したところに人工物のない弥生のムラが見学できます。

妻木山を少し登ったところに、遺構展示館と発掘体験広場があります。最盛期の頃の典型的な居住単位の配置が、最も分かるところですが、高圧電線の鉄塔があったため、竪穴住居の復元は断念せざるを得ませんでした。

発掘時に土の色の異なる部分が見つかり、違う色の部分を掘り進めることで、遺構の構造がわかるように整備して、最終的に時代の異なる3棟が重なっているところを、遺構展示館で見学できるようになっています。

竪穴住居は二千年も経つと、かつての住居跡は分からないのが普通です。しかしここには埋まりきらずに窪みが地上に残った竪穴住居がいくつかあるので、そのまま保存しています。また、この埋まらずに残った竪穴住居を再現した窪みもあります。これは後期後葉のムラの中にはそれより以前(中期後葉)に立てられた住居が、壊されたか、朽ちてしまい、痕跡の穴ぼこだけが残っている状態を再現したものです。

当時のムラ人が利用した妻木晩田の森の再現も試みています。道具に使う樹木ばかりを集めたテーマ林があり“道具の森”や食べられる木の実の樹木を集めた“木の実の森”があります。 また、虫が好む樹木を集めたテーマ林を“虫の森”と呼んで子供たちが楽しめるようにしています。

最新の調査研究成果

最新の第36次発掘調査では、集落出現期(弥生時代中期後葉[BC1世紀～1世紀前半])～展開期(弥生時代後期中葉[2世紀前半頃])における集落の変遷(竪穴住居等の有無、分布を確認することにより、丘陵斜面部にかけての住居域の広がりや土地利用など)を明らかにする目的で行っています。

斜面地であるため大規模発掘ではなく、トレンチを掘って人の生活の痕跡があるかを調査しています。妻木新山の尾根の南側斜面地で、弥生時代後期前葉(1世紀後半)くらいのムラの中心です。洞ノ原には四隅突出型墳丘墓が作られ、環濠が掘られていた頃です。妻木新山入り口の休憩舎から南西方向の緩斜面から竪穴住居が3棟(遺構3、遺構4、遺構9)のほか、貯蔵穴や段状遺構、土抗などが発掘されました。実習農地の段々畑があったところで、20%くらいの傾斜があります。

発掘された住居は弥生時代後期中葉にかけてのもので、ムラの中心が妻木新山から拡大していく時期に相当し、人口増大で尾根部だけでは土地が足りなくなって斜面地に展開しはじめた頃の様相です。段状遺構と呼ばれるものは、斜面の高いところを削って水平にした状態で道のようなものだったと思われます。全体を発掘したら、さらに多くの生活痕跡が発見されると思われます。従来、丘陵頂上部だけの住居跡で考えてきましたが、斜面地にも住居跡が見つかったことで、ムラ全体ではもっと多くの住居があり、人口ももっと多い集落だったことがわかりました。

初期整備から20年が経過して、さらに活用するためにリニューアルを進め、令和元年度は骨格復元竪穴住居を再整備しました。住居入り口の形は三角屋根の合掌型に変更しています。また垂木で覆う位置も減らして分かり易く、柱とか垂木の根元を銅板を巻いて腐食から保護するようにして、安全に見学できるようにしています。

令和二年度は、洞ノ原中央の高床倉庫を再整備しました。柱を交換するとともに、箱型のボックスを地中に設置して銅板を巻いて埋めることで土に触れないようにしています。壁板は青谷の情報も考慮して穴の開いていない壁材で覆うようにしています。妻木山地区の高床倉庫については、茅が土化して触ると崩れ、放置しておくと朽ちてしまう恐れがあります。毎年1棟づつ高床倉庫の屋根の葺き替えを進め、今年は一番大きな高床倉庫を葺き替えました。

これからの妻木晩田遺跡

妻木晩田で最も大きな四隅突出型墳丘墓である仙谷1号墓を整備するための財政調整ができましたので、今年度に仙谷地区整備基本設計を行い、来年度に実施設計を行って整備を進めます。また、妻木山地区高床倉庫の大規模修繕を行い 進入路の落石防止対策を実施します。

整備計画を進める上で並行して仙谷1号墓の発掘調査を行います。発掘調査は常時公開して行う予定なので見学もできます。さらに、妻木新山地区斜面部の調査も継続して行います。谷部のボーリング調査から当時の景観を復元するための試料を採取する予定です。長らく行われていなかった森の中を歩いて、埋まりきっていない竪穴住居跡などがないか分布調査も行います。

活用事業としては「とっとり弥生の王国」プロモーション推進事業AR技術を活用した情報発信として、弥生の館の中でスマホなどで見てもらえるコンテンツを充実させていく予定です。